



夏の思い出

校長 蒲谷 猛

『浜辺の歌』

作詞：林古溪、作曲：成田為三

あした浜辺をさまよえば
昔のことぞ忍ばるる
風の音よ 雲のさまよ
寄する波も かいの色も

ゆうべ浜辺をもとおれば
昔の人ぞ忍ばるる
寄する波よ かえす波よ
月の色も 星のかけも

はやちたちまち波を吹き
赤裳のすそぞぬれひじし
病みし我はすべていえて
浜の真砂 まなごいまは



三ツ境駅近くのりそな銀行の裏側が坂になっていますが、私が子どもの頃には、その坂を下っていったところに私営のプールがありました。自分の記憶では、それなりの大きさのプールだったと思いますが、友達と誘い合って夏の間中何回も遊びに来たことを今でも覚えています。プールサイドから二階のスタンドに上がると、あったかいおでんを売っていて、体が冷えるとそのおでんを買い、友達と輪になって食べるのが、また楽しみでした。当時は、今のような異様な暑さではなかったですから、夢中になりすぎて長く水中にいと、体が冷えて唇が紫になったものです。タオルをかぶって食べるおでんのおいしかったこと。

もう40年以上も前の夏の思い出なのに、その近くを通る度に思い出して、「ここにプールがあつてさー。」って人に話したくなります。プールそのものよりもおでんそのものよりも、毎日のように一緒に通った、友達との楽しい時間が懐かしいのかもかもしれません。

38日間の長い夏休みが終わり、子どもたちのぐっとたくましくなった顔と元気な声が学校にもどってきました。夏休み前には、朝会で、子どもたちに「いつもとは違う生活の中でこそできることに挑戦してほしい。」という話をしました。夏休み後に、私自身は、以前からやってみたかったSUP（スタンドアップ・パドルボード）を体験した報告をしましたが、特別な出来事でもなく、友達とのプール通いのようなちょっとした非日常の思い出も心に強く残るものです。それぞれに忘れられない思い出を刻んでくれたことでしょう。今夏の思い出を振り返って、「今年の夏は、〇〇に夢中になったぞ」と胸を張って言うことができれば、たとえ今は目に見えていなかったとしても、大きく成長していることは間違いありません。

8月27日から学校生活が再スタートしました。途中で前期・後期の切り替えはありますが、夏休み明けから冬休みまでの間が学校生活において一番長い活動スパンです。その間の授業日数は83日。夏休みの2倍ちょっとあります。「序・破・

急」の「破」、「起・承・転・結」の「承・転」にあたるこの時期をどのように過ごすかが「令和元年度は〇〇に取り組んだぞ」と胸を張って言えるかどうかのカギです。

子どもたちがやる気スイッチをONにし、達成感や自己肯定感を高めていくことができるように、あらためて教職員一同子どもたち一人ひとりと向き合っていきます。一層のご理解・ご協力をよろしくお願いいたします。

【お願い】

自動車でのお子さんの送迎は、原則として禁止です。学校の周りに駐車することで、近隣の皆様にご不便をおかけすることになります。また、近隣の病院等の駐車場を利用することも、ご迷惑となります。マナーを守って、お互い気持ちよく生活できる環境づくりにご協力くださいますよう、お願い申し上げます。



「ナイス！トライ」

校長 蒲谷 猛

里の秋

作詞：斎藤 信夫

作曲：海沼 実

静かな静かな 里の秋

お背戸に木の実の

落ちる夜は

ああ 母さんとただ二人

栗の実 煮てます

いろいろばた

明るい明るい 星の空

鳴き鳴き夜鴨（よがも）の

渡る夜は

ああ 父さんのあの笑顔

栗の実 食べては

思い出す

さよならさよなら

椰子（やし）の島

お舟にゆられて 帰られる

ああ 父さんよ御無事でと

今夜も 母さんと

祈ります



ワールドカップラグビー日本大会が、9月20日に開幕し、日々熱戦が繰り広げられています。先日の日本が、屈指の強豪、世界ランク1位のアイルランドを破った衝撃的な勝利には、本当に興奮しました。日本チームの快進撃にラグビー通ではない人々のワールドカップへの関心も高まり、応援する機運も一気に盛り上がってきたように思います。

前回のワールドカップでは、キック前のポーズが話題になった五郎丸歩選手の大活躍で、キックに注目が集まりましたが、それでも、ラグビーの醍醐味といえば、やはり「トライ」ではないでしょうか。重戦車フォワードが敵のディフェンスをなぎ倒してのトライ、ボックスの華麗な展開で敵ディフェンスを翻弄してのトライ、個人技で敵を抜き去り独走してのトライなど、どれも見る者を魅了し、興奮を最高潮にしてくれるプレーです。現在のルールでは、トライで5点獲得、トライ後のコンバージョンキックで2点獲得と、得点の上でもトライの比重が高くなっています。

ところで、この「トライ」、英語に直せば「Try」、つまり、「挑戦する」という意味ですよね。何で相手のゴール内にボールをタッチするこの得点技を「トライ」と呼ぶのでしょうか。

昔のラグビーのルールでは、トライをただけでは得点にはならなかったのだそうです。トライしたあとのキックを決めて、はじめて得点できるというルールでした。つまり、「トライ」することによって、点数を得ることのできるキックに「挑戦する」権利を獲得した、ということだったのです。

現在のルールで考えると、「トライ」でも得点が得られるので、何に「挑戦する」のかはわかりにくいかもしれませんが、昔のルールで考えるとよくわかります。苦勞してやっと取ったトライも、キックをはずせば得点は「0」。例えば、10トライでノーゴールだったチームと1トライで1ゴールだったチームとでは、後者の方が勝ちとなるわけですが、これではあまりにも「トライ」の苦勞が報われないということになり、トライにも得点が与えられるようになったのだそうです。

旧ラグビールールでは「1トライ1ゴール」に敗れてしまう「10トライノーゴール」ですが、スポーツとしてではなく、私たちの日々の学びや成長として考えると、必ずしも「1トライ1ゴール」の方が優れているとは言えません。たとえ「ノーゴール」でも、ゴールを目指して何度も繰り返される10トライ、20トライという「挑戦」そのものが、自分を成長させることは往々にしてあることだからです。秋まっさかり、読書の秋、スポーツの秋、芸術の秋、何をするにも好機であるこの季節に、子どもたちには、自分の課題に積極的に「挑戦」してほしいです。そのためには、一人ひとりの子どもの好プレーを引き出す、教師の絶妙の「パス」が重要です。今まで以上の、ていねいな見取りと個に応じた支援を全職員で心がけていきます。



子どもが物事を正しく理解するためにすべきこと

副校長 大嶽 賢司

過去に例を見ないような大型で強い勢力の台風15号が関東地方に大きな爪痕を残し、その記憶が覚めないうちに台風19号が再び関東地方に猛威を振るいました。各地の被害は甚大で、元通りの生活に戻るにはかなりの時間と労力、そして、費用がかかるようです。本校も、強風によって倉庫が移動したり、木の枝が折れたりしましたが、特に大きな被害はありませんでした。その台風の合間を縫って行われた第9回ラグビーワールドカップ日本大会の準々決勝で、日本代表は南アフリカと対戦し、残念ながら3-26で敗れましたが、台風の被災地をはじめ、全国各地に勇気と感動を与えてくれました。予選リーグ4戦4勝の日本代表の戦績もさることながら、田村選手の51得点や松島選手の5トライは、他国の選手と比較しても大変素晴らしい成績となりました。

季節は秋。学習にもスポーツにも読書にも、最も適した時期となりました。学校は、前期の教育課程を終了し、後期に入ってまもなく1か月を経過しようとしており、後期の教育活動がようやく軌道に乗ってきたところです。10月26日に行われた土曜参観には、多数の保護者の方々にお越しいただき、お子さんの学習や生活の様子をご覧いただきました。ご多用の中をご来校くださりまして、誠にありがとうございました。

さて、話は変わりますが、上の12行の文章は日本語で作成されています。そして、数か所に数字が使われています。「数字」とは、「数」を視覚的に表した文字ですが、この「数字」や「数」に関して言えば、特に日本語は習得するのが難しいとされているのを皆さんはご存じですか。

例えば、「1回、2回、3回」は、「いっかい、にかい、さんかい」と読みますが、「1階、2階、3階」は「いっかい、にかい、さんがい」となります。同じ「かい」という発音なのに、なぜか「3階」の時だけ「がい」と読むのです。また、「本」の読み方は「ほん」ですが、「1本、2本、3本」と書くと、「いっぽん、にほん、さんぽん」となります。「ほん」を「ぽん」と読むときや「ぽん」と読むときに慣習的に決まっているのです。

「4」も大変不思議で、「4歳、4点、4番」は、全て「よん」と読みますが、「4年、4円、4人」は、全て「よ」と読みます。これは、後ろに付く言葉で読み方が決まる例です。しかも、「4番」に至っては通常「よんぽん」と読みますが、野球の「4番バッター」となると「よぽん」と読むのが通例です。

また、1から一つずつ数を唱えようと、「いち、に、さん、し、ご、ろく、しち、はち、きゅう、じゅう」となりますが、10から下がって唱えようと、「じゅう、きゅう、はち、なな、ろく、ご、よん、さん、に、いち」となります。「4」と「7」の読み方が、唱える方向で違うのです。不思議だと思いませんか。日本語を習得しようとする方々にとって、これらの理解が難しいのは想像に難くないでしょう。使用法ごとに読み方が違うのですから。

実は、このような言葉は、子どもたちの身近にいる人たちが普段から正しく使うことによって、知らず知らずのうちに身についていくのです。子どもたちを支える人々が言葉の用法を正しく理解し、正確に伝えていくことによって、子どもたちはそれを学習していくのです。

言葉を例にしましたが、それ以外のことであっても、子どもたちに物事を正しく理解させるためには、子どもたちを支える人々が、正しいことを正確に伝えていく必要があるのです。子どもに見せたくない番組などと、一部のテレビ番組が話題に挙がる場合がありますが、それも、子どもたちに正しいことを正確に伝えていく妨げになるとの判断からでしょう。パソコンやスマートフォンのフィルタリングも同様で、子どもたちに正しいことを正確に伝えていく妨げになりそうなサイトを閲覧できなくすることは必要不可欠といえます。

神戸市の教員が、同僚をいじめていた事件が世間を騒がせましたが、「いじめはよいことだ」とメッセージを発信しているようなものですから、正しいことを正確に伝えていくことを職務としている教員として、いちばんしてはいけないことであることは言うまでもありません。

正しいことを正確に伝えていくことを繰り返して、子どもたちを正しく導いていけるよう、これからも職員一丸となって精進してまいります。保護者の皆様には、今後も変わらぬご理解とご支援をお願いいたします。